



※日本教育新聞社から許可を得て掲載しています。

文字を手書きさせる教育 「書写」に何ができるか 鈴木 慶子 著

落ち着き安定した思考状態に

PC全盛時代に著者は、学生に手書きさせる「書写」の実践に取り組んでいる。その実践から生まれた知見の数々は、実に貴い。帯表紙に「身体に〈言葉〉を蓄えるために、手書きでなければならないことを認識させている」という鮮烈なコピーがある。

本書を読みながら今どきの学生の手書きの実態を知り、愕然とした。少なくとも教師を目指す者は、時代がどう変わろうと手書きの習慣を残していなければ話にならない。いくら電子黒板が便利でも、チョークを使った黒板の授業はなくなるからである。

現職時代の授業を思い出す。国語の授業では、毎時間と言っていいくらい、学習者と一緒に視写をしていた。評者は黒板に、彼らはノートに、それぞれ同じ文章を書き写す。すると著者が言っている「落ち着いて安定した思考状態」に教室中が包まれた。

おそらくこれほど「書写」の重要性を熱く語った国語教育書が書かれたのは初めてだろう。学力低下の問題があちこちから聞こえてくる。しかし、書写という視点から学力低下の実態を扱った本はなかったはずである。

この本をバイブルにして、大学の教師、少なくとも国語科教育関係の講座を担当の方は、学力向上の先頭に立っていただきたい。書写が学生の学力向上に貢献するからである。

〈庭野 三省・新潟県十日町市教育委員会教育委員〉